



令和4年度学術委員会学術第3小委員会報告

病院薬剤部門の現状調査および診療報酬改定特別調査データの利活用推進に関する調査・研究

委員長

東北大学病院薬剤部

小原 拓 Taku OBARA

委員

昭和大学病院臨床研究支援センター

東北医科薬科大学病院薬剤部

就実大学薬学部

内倉 健 Takeshi UCHIKURA

菊池 大輔 Daisuke KIKUCHI

田坂 祐一 Yuichi TASAKA

宮城県立がんセンター薬剤部

山形大学医学部附属病院薬剤部

医療法人鉄蕉会亀田総合病院薬剤管理部

土屋 雅美 Masami TSUCHIYA

畠山 史朗 Shiro HATAKEYAMA

舟越 亮寛 Ryohkan FUNAKOSHI

背景・目的

日本病院薬剤師会（以下、日病薬）では、病院薬剤師の活躍を社会・国民に向けて広くアピールし、次期診療報酬改定のための重要な基礎資料とすること等を目的に、毎年「病院薬剤部門の現状調査」（以下、現状調査）を実施している。また、令和元年度には、診療報酬改定で議論されるであろう内容に特化した「診療報酬改定特別調査」（以下、特別調査）を実施している。現状調査の結果は、診療報酬改定の際の中央社会保険医療協議会（以下、中医協）での検討の基礎資料として活用されているとともに、例えば、中小病院の薬剤師の役割の検討、経時的変化を評価する際の資料として、日病薬内部および各県病薬で活用されてきた。しかしながら、全国規模で経年的に実施されている日病薬現状調査のデータは、より広範囲に利活用され得る有用なデータであると考えられる。本委員会の目的は、次に示す活動計画を通して、日病薬現状調査・特別調査データのさらなる利活用を推進することである。また、本委員会活動によって得られる①直接的な成果としては、a. 総務部・医療政策部と連携した恒常的な集計・解析体制の充実、b. 病院薬剤師の役割に関するエビデンスの充実、c. 国民に対する病院薬剤師の役割の周知・発信の機会の増加を、②間接的に期待される社会的成果としては、a. 日病薬の活動への会員の参画の推進、b. 病院薬剤師の役割に対する評価の向上、c. 病院薬剤師の業務環境の改善、d. 病院薬剤師の人材確保を想定している。

活動計画

1. 各種病院薬剤師業務の実施状況に関する解析（令和2～4年度）
 - a. 病院薬剤師業務の変化と診療報酬改定・各種通知発出等との関連の評価
 - b. 病院薬剤師業務の実施状況（有無・程度）に与える要因の抽出
2. 日病薬会員を対象とした調査（令和3年度）
3. 恒常的な集計・解析体制の充実に向けた検討（令和2～4年度）
 - a. 解析用統合データベースの整備
 - b. 解析体制の充実

なお、日病薬現状調査・特別調査データを用いた解析の実施・公表および解析テーマの募集のための調査実施にあたっては、日病薬と調整のうえ、委員会代表者所属機関である東北大学における倫理審査委員会の承認（受付番号：2021-4-074）に基づいて実施する。また、本調査の結果を発表する際は、回答施設を特定できないようにする。

令和4年度の活動状況

令和4年度には、オブザーバーを含む委員会を1回、全委員での委員会を1回、一部委員での委員会を4回（感染領域・副作用領域・がん領域・経済領域）、学術委員会以外の日病薬関係者を含む「現状調査データ公開を含めた一般会員向けの利活用について」と題したWeb会議を1回開催した。

表 各種病院薬剤師業務の実施状況に関する解析結果の公表状況

A. 学会発表

1. 土屋雅美, 菊池大輔, 畠山史朗, 田坂祐一, 内倉 健, 舟越亮寛, 小原 拓: 病院薬剤部門の医薬品副作用自発報告に関する業務実態の解明, 第24回日本医薬品情報学会学術総会, 2022.7.9-10.
2. 菊池大輔, 土屋雅美, 畠山史朗, 田坂祐一, 内倉 健, 舟越亮寛, 小原 拓: 病院薬剤師における医療提供施設間での患者情報共有に関する調査, 第24回日本医薬品情報学会学術総会, 2022.7.9-10.
3. 内倉 健, 田坂祐一, 畠山史朗, 菊池大輔, 土屋雅美, 舟越亮寛, 小原 拓: 感染防止対策加算を指標とした医療機関における病院薬剤師の取り組みと経済性評価, 第24回日本医薬品情報学会学術総会, 2022.7.9-10.
4. 畠山史朗, 田坂祐一, 内倉 健, 菊池大輔, 土屋雅美, 舟越亮寛, 小原 拓: 一般病院における感染防止対策加算算定へ薬剤師が与える影響の検討, 第24回日本医薬品情報学会学術総会, 2022.7.9-10. (優秀演題賞受賞)
5. 菊池大輔, 土屋雅美, 畠山史朗, 田坂祐一, 内倉 健, 舟越亮寛, 小原 拓: 病院薬剤部門における医薬品リスク管理計画 (RMP) の利活用実態の解明, 第25回近畿薬剤師学術大会, 2023.2.4. (優秀賞受賞)

B. 論文発表

1. M Tsuchiya, D Kikuchi, S Hatakeyama, Y Tasaka, T Uchikura, R Funakoshi, T Obara : Characteristics of hospitals that report adverse drug reactions : Results of a nationwide survey in Japan, *J Clin Pharm Ther*, 47, 1240-1248 (2022).
2. D Kikuchi, M Tsuchiya, S Hatakeyama, Y Tasaka, T Uchikura, R Funakoshi, T Obara : Actual status of patient information sharing among healthcare delivery facilities : a survey by the third subcommittee, committee on academic research, the Japanese society of hospital pharmacists, *J Pharm Health Care Sci* [Internet], 2022 Nov 4, 8. doi : 10.1186/s40780-022-00260-z.
3. 菊池大輔, 土屋雅美, 畠山史朗, 田坂祐一, 内倉 健, 舟越亮寛, 小原 拓: 病院薬剤部門における医薬品リスク管理計画 (RMP) の利活用実態の解明, 日本病院薬剤師会雑誌, 59, 833-839 (2023).

1. 「各種病院薬剤師業務の実施状況に関する解析」

令和2年度の活動の結果確定させた2015～2020年度の現状調査データの解析対象施設の回答結果に基づいて、下記テーマの解析・公表を推進した(表)

- (1) 病院薬剤部門の医薬品副作用自発報告に関する業務実態の解明
- (2) 病院薬剤師における医療提供施設間での患者情報共有に関する調査
- (3) 感染防止対策加算を指標とした医療機関における病院薬剤師の取り組みと経済性評価
- (4) 一般病院における感染防止対策加算算定へ薬剤師が与える影響の検討
- (5) 病院薬剤部門における医薬品リスク管理計画(以下、RMP)利活用実態の解明
- (6) がん医療における薬剤師の関与に関する記述的研究

このうち、(2) 病院薬剤師における医療提供施設間での患者情報共有に関する調査については、*J Pharm Health Care Sci*に結果を公表したので、その結果を概説する¹⁾。

【背景】医療従事者間の情報共有は、質の高い医療を提供するために重要である。本研究の目的は、日病薬が実施した2020年の病院薬剤部門現状調査データを用いて、日本の病院の薬剤部における情報共有の実態を明らかにすることである。【方法】2020年5～8月にかけて、対象医療機関8,278施設のうち3,612施設(43.6%)から回答を得た。ほかの医療提供施設との患者情報の共有に関する設問への回答を集計した。【結果】保険薬局、

自施設以外の病院、介護施設と情報を共有している病院の割合は、それぞれ40.6%、36.4%、27.3%であった。病院が保険薬局と情報共有する際に使用するツールは「トレーシングレポート」が最も多く(54.3%)、自施設以外の病院や介護施設との情報共有では「薬剤サマリー」が多く使用されていた(それぞれ77.4%と78.0%)。保険薬局や自施設以外の病院との情報共有を行っている病院の割合は、病床数の増加とともに増加する傾向が認められたが、病床数と介護施設との情報共有の割合に関連は認められなかった。【結論】ほかの医療提供施設と患者情報を共有している病院の割合は半数未満であった。病院と保険薬局との情報共有は主にトレーシングレポートによるものであり、病院と自施設以外の病院や介護施設との情報共有は主に薬剤サマリーによるものであった。

2. 日病薬会員を対象とした調査

奥田副会長、学術委員会島田委員長、総務部会室井部長、学術第3小委員会オブザーバー外山氏、学術委員会事務局、令和4年度学術第3小委員会委員により、『現状調査のデータ公開を含めた一般会員向けの利活用について』と題したWeb会議を開催し、本委員会では一般会員向けのアンケート調査は行わず、一般会員による利活用に向けた課題などについて整理するとどめることとなった。

3. 恒常的な集計・解析体制の充実に向けた検討

昨年度までに2015～2019年度の現状調査の設問の対応表を作成・共有するとともに、恒常的な集計・解析を実施する際のデータ管理手順書のプロトタイプとして、

委員向けデータ管理手順書を作成した。今年度は、現状調査データを公開する場合にはどのようなことが必要かを、日病薬の立場および利用者（一般会員）の立場の両面から整理した。そのうえで、『現状調査のデータ公開を含めた一般会員向けの利活用について』と題したWeb会議を開催し、恒常的な集計・解析体制の充実に向けては、どの部署がどのような枠組みで関与するのかなどについて、学術小委員会の枠を超えた継続的な議論が必要であるとの結論に至った。

令和5年度の活動予定

本来であれば、本委員会は令和4年度で活動を終了する予定であったが、2022年10月20日にWeb開催された「現状調査のデータ公開を含めた一般会員向けの利活用について」の議論を受け、令和5年度も下記活動を引き続き行うこととなった。

「各種病院薬剤師業務の実施用状況に関する解析」に関しては、引き続き、(3) 感染防止対策加算を指標とし

た医療機関における病院薬剤師の取り組みと経済性評価、(4) 一般病院における感染防止対策加算算定へ薬剤師が与える影響の検討、(6) がん医療における薬剤師の関与に関する記述的研究に関する結果の公表を進める。「恒常的な集計・解析体制の充実に向けた検討」に関しては、中医協での議論の根拠の提示など、日病薬内における現状調査データのさらなる活用のための日病薬関連部門・委員会等との意見交換の実施と、本委員会から得られた結果の一般会員へのフィードバック研修会の開催を予定している。

引用文献

- 1) D Kikuchi, M Tsuchiya, S Hatakeyama, Y Tasaka, T Uchikura, R Funakoshi, T Obara : Actual status of patient information sharing among healthcare delivery facilities : a survey by the third subcommittee, committee on academic research, the Japanese society of hospital pharmacists, *J Pharm Health Care Sci* [Internet], 2022 Nov 4, **8**. doi : 10.1186/s40780-022-00260-z.



DO YOU KNOW?

PICC

Peripherally Inserted Central venous Catheterの略。「末梢挿入型中心静脈カテーテル」を意味し、腕から挿入する中心静脈カテーテルのことを言う。頻繁に静脈への注射を行わなくてはならない場合に適応が検討される。PICCは通常を中心静脈カテーテル（鎖骨や首、太ももの付け根にある血管から挿入する）と比べ、腕から比較的簡単に挿入できるため、肺や大きな血管を損傷するなどの重大な合併症は起こりにくい。また、カテーテルの先端が中心静脈に位置しているため、抗がん剤のような刺激の強い薬剤を使用した場合に起こり得る、静脈炎や血管外漏出のリスクを

下げることができる。正しくカテーテルを管理すれば、通常を中心静脈カテーテルに比べPICCの感染の発生率は低いとされている。一方で、挿入状態のまま長期管理することが可能であるため、入院中にPICCを挿入しそのまま退院する場合がある。この時、自宅等での管理を適切に行わないと、チューブが閉塞することや体の外に出ているカテーテル部分が引っ張られることによるトラブル、さらには穿刺部感染から敗血症に至る可能性があり、管理者（患者本人や家族）への十分な指導が重要となる。

鳥取大学医学部附属病院薬剤部

金田 達也